

富士登山のあり方に関する提言

With コロナ時代だからこそ見えてくる富士山の多様な魅力

この提言は2020年11月14日（木）ハイランドリゾートホテル&スパで開催した「富士登山のあり方に関する意見交換会」で出席者の皆様から提案された意見を基にとりまとめたものです。

<意見交換会ご出席者（発言順）>

堀内 眞 山梨県立富士山世界遺産センター 学芸員

北原 正彦 山梨県富士山科学研究所 専門員

中村 修 富士山吉田口旅館組合 組合長

近藤 光一 (株)合力 代表取締役

羽田 正利 富士吉田市産業観光部 富士山課長

野口 健 特定非営利活動法人富士山クラブ 理事長

堀内光一郎 一般社団法人富士五湖観光連盟 会長

2020年12月

一般社団法人富士五湖観光連盟



富士山七合目 夏の夜明け（写真提供：中村修氏）

富士登山のあり方に関する提言

1. 富士山は、もう1泊して、2泊3日でゆっくりと登ろう！

麓の町に前泊して富士講の聖地などを訪ねてから登ろう
富士山五合目に宿泊して高度順応をし、翌日、登山をしよう
富士山から下山したらその晩はふもとでゆっくり1泊しよう

2. 宿泊した山小屋の前で御来光を拜んでみよう！

富士山吉田口の山小屋はすべての小屋の前から御来光を仰げます

3. 無理に登頂にせず、自分の行けるところまで登ろう！

山頂に行かなくても富士山の魅力は十分に味わえ楽しめます
各山小屋で異なる富士講とのつながりを知ると味わい深い

4. 昼間に歩く楽しさを見直そう！

景色を見ながら歩けば楽しさ倍増、疲れは半減
独立峰で樹木もない富士山からの展望は最高
高山植物、樹木の形、地形、昆虫、鳥など富士山ならではの魅力もたっぷり

5. 「富士講」の歴史に思いを馳せて登ろう！

夜間の登山では神仏と交信できる大切な時間を過ごそう
山頂では、自身の影（ブロッケン現象）を見る「御来迎」を経験してみよう
吉田口登山道をゆっくり登る「ふもとから登山」は富士講の歴史を満喫できる

6. 富士山でしか見られない自然を楽しもう！

富士山には絶滅危惧種など貴重で多様な生態系が残されている
富士山ならではの自然を観察しながら歩けば楽しさ倍増

7. ガイドツアーで満足度をさらに高めよう！

何気なく見過ごしてしまう風景もガイドの説明を聞けば目からうろこの話がたくさん

With コロナ、Post コロナというこれからの時代に、富士山の魅力をどなたにも楽しんでいただけるよう上記「富士登山のあり方」を提言します。

堀内光一郎会長

本日は大変お忙しい中、富士山に対して様々な面でご造詣の深い先生方にご列席賜りましてありがとうございます。心から感謝申し上げます。さて今年の夏は私の知る限りでは噴火を除いて有史以来初めて富士登山が禁止された年となりました。第二次世界大戦の時ですら国威発揚の意味もあり、富士山の神聖さを求めて富士登山をしていたと聞いていますので今年はいかに異常であったかということがわかります。

その結果として観光面、経済面で大変大きなダメージがありました。更に富士登山禁止はそれにとどまらず、日本人の心、信仰面、宗教面、そして社会面といったさまざまな面に大きなダメージを与えたと思います。コロナはついに日本人から富士山に登る機会すら奪ってしまうという社会的な現象になりました。

しかし私はこれを前例として常態化してはいけなくと考えます。大切なのは富士登山がそもそもどういった行為であり、日本人はどういった意味を持ってとらえてきたのかという原点をしっかりと見つめ直すことです。今日はこの原点に立ち返って、富士登山のあり方について皆様方から様々なご意見をお話しいただき、その中から今後の姿について私共の提言を出していきたいと思っています。流行り言葉で言えば「サステナブルな富士登山」について考え、二度とこういった不幸なことが起きないような形での富士登山のありかたを考えていきたいと思っています。例えば歴史であり、文化であり、心であり、作法であり、健康・科学といった様々な面からのアプローチが大切だと思っております、さらに経済面、観光面も関わってまいります。

今日は限られた時間ですが皆様方から忌憚のないご意見を賜り、未来に向けて建設的な方向性を見つけていただけたらと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

会長挨拶に続き、富士吉田市 羽田正利富士山課長から 2019 年の富士登山の状況などを説明いただき共通認識をしたあと意見交換に入りました。

時間を急がず、富士山の歴史を想像しながら富士登山をしよう

堀内眞氏

富士山世界遺産センターで富士山の文化遺産としてのあり方を知っていただく仕事をしています。世界遺産の登録に当たってはイコモスからいくつか宿題が課せられていますが、その一番大きなものが「下方斜面における巡礼路の特定」です。世界遺産には富士山本体をはじめ、それに付随する北口本宮富士浅間神社や吉田口登山道、登山口である吉田の2軒の御師住宅、北面に展開する富士五湖など、全体で25の構

成資産からなっていますが、これらの全体を1枚の絵をみるような形で多くの人々に示せというものです。富士山の登山道はもちろん、山頂や御中道、八海をめぐる巡拝路、さらには静岡県側の人穴富士講遺跡、白糸ノ滝ですとか、山宮浅間神社、村山浅間神社、富士山本宮浅間大社などがどのようにつながっているのか、その全体を明らかにすべきだとしています。

私たちは、吉田口登山道から着手し、現在は青木ヶ原の樹海中に延びる道など調べています。ほとんど知られていないものですが、精進穴など信仰に用いられたいくつかの溶岩洞穴が残っていて、そこに通ずる複数の道筋を追求しています。あるいは、鳴沢村から県境を超えて直接人穴に向かう古道、県境から先は道が途切れていて、歩くのも困難な状況です。それらを単に調査するだけでなく、活用につなげていくことを目標に、そのためのデータを作成しています。

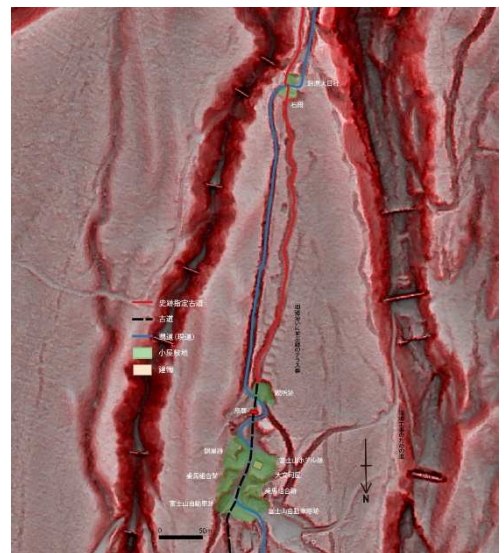
富士山に大衆登山が開始されたのは室町時代の後期、応仁文明の乱以降のことで、その当時の記録(『勝山記』)に、「富士へ道者参ること限りなし」の記述があります。道者と呼ばれる登山者が富士山に登頂していたのです。往時の登山道は現在の登山道と同じ道筋なのか、起点となるのは吉田だけなのか、西方の河口湖周辺からのものが存在するのか、そういうことを全体的に明らかにすることが求められているわけです。

きょうは「歴史的な富士登山をしましょう」という提案をしたいと思っています。資料は江戸時代のもの、天保8年(1837)の「大嵐村外六ヶ村絵図」(富士河口湖町)ですが、この中にも現状につながる登山道と古道や山麓を繋ぐ信仰の道などが重層的に描かれます。河口湖以西から山内へは船津胎内経由で吉田口登山道へ結節しますが、そのほか山内に入る別の道もあって、信仰に基づく道と農業や林業など生業の道を使い分けることが行われていました。

次の「赤色立体地図」ですが、現状の登山道、それ以前の道として認識できるもの、山小屋の所在地、建物の跡などがどのように残っているのかを比較して見てもらうために用意しました。一例として、馬返ですが、その鳥居付近は富士吉田市が平成18年(2006)



天保8年(1837)「大嵐村外六ヶ村絵図」大嵐区蔵



村石真澄「赤色立体地図で辿る吉田口登山道の歴史」(『地図中心』2020年8月号)より引用

に調査を開始したころには、藪の中に柱石が立っているのみで、その手前を道が迂回していました。発掘調査をして出土した遺構を埋設保存のうえ、盛土をして整備したわけですね。つまり今の登山道は、表面を整備しただけではなく、地下を調査して埋設保存したものです。だから史跡に位置づけられているのです。

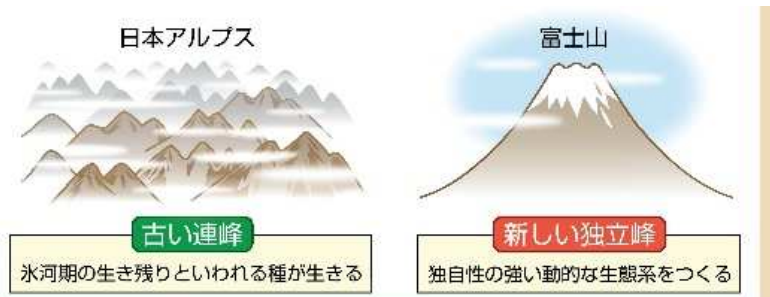
馬返の先には、禊所の建物跡がありますが、旧道はここを突き抜ける形で山頂に延びていました。恩賜林下賜後、道が付け替えられ、道を塞ぐように禊所が建てられたという変遷があって、建物跡を発掘調査した結果、このような事実が明らかになったのです。一合目もそうですし、二合目も調査が行われました。古写真や赤色立体地図をみると、五合目下もだいぶ道筋が変わっていることがわかります。旧来、小屋が林立していたところが、現在は小屋の跡しか残っていない場所が何カ所かあって五合目に到着する形になります。さらに登っていくと七合目の山小屋に到着しますが、現状の道だけでなく旧来の道にそった祠堂や施設などを散策しながら登山するという形態があると思います。

ですので「時間を気にするのではなくて、歴史的な想像力を掻き立てながらじっくりと登山する、そのようなものに取り組んだらいかがでしょうか」ということを申し上げます。その素材となるのが世界遺産センターでやっている調査だということで、ぜひこのような登山も加えてもらって、「じっくりと登りましょう」という提案をさせてもらいます。

富士山ならではの自然を観察しながら歩けば楽しさ倍増

北原正彦氏　私は研究所で世界文化遺産・富士山の基盤となっている自然や生態系について、その重要性とか希少性、またそれらを保全していくにはどうしたら良いのかというようなことを調査研究しております。今日はそういった経験をもとに事務局さんから提案のありました自然科学的な側面から見た合理的な登り方、それから登頂やご来光にとらわれない中腹や山麓を含めた富士山全体の魅力、多様な自然観察を基にした登山のあり方について提案したいと思っています。

ご承知のように富士山は日本一の高山ですが、日本の高山である3000m峰というのはすべて本州中部地方に存在しています。そして富士山以外の3000m峰



はすべて日本アルプスにあります。ところが同じ3000m以上の高山なのですが、富士山と日本アルプスでは高山生態系に大きな違いが見られるのです。その違いがどう

して生じたかと言いますと、第一に富士山は独立峰ですが、日本アルプスの 3000m 峰はほとんど山脈の中の一つの峰として存在しています。この富士山が独立峰であるということが富士山の生態系に大きな影響を及ぼしました。それと富士山は地下からマグマが噴出してできた火山ですが、日本アルプスは褶曲山脈といいまして、地層に圧力が掛かり褶曲しそれがだんだん隆起してできた山です。こういった成立様式の違いも富士山と日本アルプスの生態系の違いに大きく関係しました。

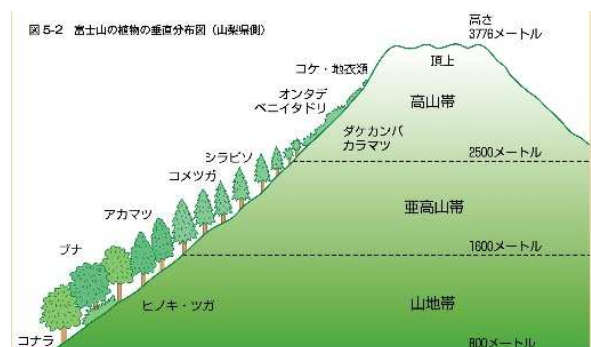
一方、成立した年代の違いも、両者の生態系の違いに大きく関係しています。富士山は、今見えているのは新富士火山と言いまして、長く見積もっても 1 万年くらいの歴史しか持っていません。ところが 3000m 峰を抱く日本アルプスは、地層が隆起してできあがった褶曲山脈ですが、例えば南アルプスの場合、少なくとも 100 万年以上の歴史を持っていると言われていています。ですから、富士山（新富士火山）の歴史を一つ分とすれば、南アルプスはなんと富士山 100 個分以上の歴史を経てできあがった訳です。このことからもお分かりと思いますが、現在富士山に見られる生態系はまだまだ成長していく途上の生態系であり、今後もどんどん変化し、進化していく可能性のある生態系なのです。

ということで、私が特に強調したいのは「富士山のような高山帯の生態系」を見たかったならば、これは正に富士山に登るしかないのです。日本アルプスにいくら登っても富士山のような生態系を観察することはできません。ですから今日は「富士山ならではの生態系」を観察し楽しむ、そういう富士登山のあり方を皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

今日は皆さんのお手元に資料を持参しましたが、これは富士山が世界文化遺産になったときに東京の誠文堂新光社から共著として出版した「まると観察・富士山」という本の一部を抜粋したものです。まず 1 ページ目の左側の方には富士山の特徴的な動物や植物が並んでいますが、注目してほしいのは右側の方です。富士山は独立峰ということで、生物の垂直分布をはっきりと明白に観察することができます。

標高別に 800m から 1600m くらいを山地帯、1600m から 2400m くらいを亜高山帯、それ以上を高山帯と呼んでおりますが、この標高ごとにそこに生活し見られる植物や昆虫、鳥、ほ乳類といった生物が違って来るんですね。で、

富士山を麓のほうから山頂に向かってじっくりと歩いていただくとその生物相の違い（垂直分布）を明瞭に観察することができるのです。もちろん日本アルプスでも同じようなことが体験できますが、一つの孤立した山の中で徐々に高度を上げながら、こういうことが観察できるのは富士山の大きな魅力の一つだと思います。



2 ページ目ですが、左の方に富士山と日本アルプスの生態系の違いが書いてあります。例えば富士山には火山性の溶岩洞穴が多く見られ、コウモリ類が多数生息していますが、中にはフジホオヒゲコウモリとフジの名がつく固有性の高いコウモリも生息しています。また良好な里山環境の指標種といわれるフクロウ、このフクロウが富士山の山麓地帯の里山環境には高密度で生息していることが分かっています。我々の調査では、1羽のフクロウが1年間に1000頭ものネズミを餌にしていることが分かりました。また餌であるネズミ類は木の実、果実、種子などを餌にしていますので、その背景には多様な樹種からなる生物多様性に富んだ森がある証しとなります。ということで、生態系の頂点に位置する猛禽類のフクロウがたくさん生息している富士北麓の里山環境は、生物多様性に富んだ豊かな自然が未だに多く残されていることの証しと言えるでしょう。



フクロウの巣立ち雛

それから富士山に生息する鳥類ですが、先ほど申し上げた垂直分布の違いが明瞭で、山麓部から高山帯にかけて出現してくる鳥類の違いをはっきりと観察することができます。山麓部では、オオジシキとかアカモズといった環境省のレッドリストで絶滅危惧種に選定されているような希少な鳥類を梨ヶ原の大草原で観察することができます。その他にも山麓部の大きな草原には多くの絶滅危惧種が生息しており、正に生物多様性のホットスポットと呼べる場所を形成しております。もし、首都圏域でオオジシギやアカモズを観察したければ、富士北麓の大草原地帯を訪れるしか方法がない訳です。

それから右のページには山地帯から亜高山帯の鳥類が掲載されています。例えば、富士山科学研究所のまわりにはオオルリという鳥が毎年夏になると南方からやってきて盛んにさえずっているのを観察することができます。さらに高山帯に目を向けますと、ウソとかホシガラスとか高山帯に特有の鳥類を観察することができます。繰り返しになりますが、富士山ではこういった標高ごとの鳥類相の違い、すなわち、垂直分布の違いを明白に観察することができ、これが大きな魅力の一つになっているのです。



オオルリ

さらに哺乳類も豊富に生息しています。富士山の場合は大型の哺乳類としてニホンカモシカ、ツキノワグマ、ニホンジカなど、中型の哺乳類としてテン、キツネ、タヌキ、イタチなど、それから小型の哺乳類としてネズミとかモグラの仲間など様々な哺乳類が生息しております。中でも富士山の高山域に生息しているニホンカモシカは、国の特別天然記念物であり、山梨県の県獣にもなっていますが、富士山特有の生態を示し固有性が高い個体群であることが当研究所の高田研究員の調査で分かってきて、

とても貴重な個体群と言えます。例えば、富士山高山域のカモシカは、日本アルプスなどに棲んでいるカモシカと比べ活動範囲がとても広いのが特徴です。その理由として考えられるのは、富士山は孤立峰で気象条件が厳しく、そのため餌資源も他の山に比べると非常に限られているために、行動圏が広がっているのだと考えられます。すなわち、富士山の高山域に生息しているカモシカは行動範囲が広くないと十分な餌が確保できず、生命を維持していくことができないと考えられるのです。このように富士山独自の生態特性を有するカモシカですが、遺伝的な解析がまだ行われておらずはっきりとしたことは言えませんが、もしかすると、富士山高山域のカモシカは固有性がとても強く、富士山でしか護ることができないとても貴重な個体群であるかもしれません。なお、他の哺乳動物の多くが夜行性なのですが、カモシカは昼行性の哺乳類ですから、例えば五合目付近の御中道あたりを散策すると観察する機会に恵まれるのではないかと思います。



ニホンカモシカ

それから次は昆虫のチョウ類です。実は私の専門は昆虫生態学でチョウ類を中心にこれまで調査研究を続けてまいりましたが、まずは富士山のチョウ類を語る上で、高山チョウのお話をしておきます。高山チョウというのは卵、幼虫、蛹、成虫の全生活環を通常亜高山帯以上の高標高の場所で生活しているチョウ類で、本州では9種類が知られています。さて、皆さんは富士山には何種類くらいの高山チョウが生息していると思われますか？富士山は日本一のっぽの高山ですから9種類全部いてもおかしくありませんよね。答えを言います。0種です。皆さんとても驚かれたと思います。富士山には高山チョウが1種も生息していないのです。なぜなのでしょう。実はこのことには富士山の歴史が関係しているのです。

冒頭でお話ししましたが、富士山（新富士火山）はまだ年齢が1万年に満たないとても新しい山です。高山チョウは氷期の遺存種と言われており、寒冷で冷涼な気候に適応しており、最終氷期（約6万年前～約1万年前）に繁栄した種群ですが、約1万年前に最終氷期が終わり温暖な時代に移っていくと高山チョウの生息場所は寒冷冷涼な高緯度地方や高標高地に移りました。その時、現在の富士山（新富士火山）はまだできあがっていませんでした。ということで、長い歴史を有する日本アルプスには高山チョウが生息していますが、日本一の高山なのにとっても若い富士山には高山チョウが生息していないのです。長い説明になってしまいましたが、高山チョウがいない高山域生態系、これも富士山の大きな特徴と考えることができるのです。

さて高山チョウが1種もいないとなるとそれじゃ富士山のチョウ相はとても貧弱なのかと？そんなことは全くありません。実は富士山では「富士山を特徴づけるチョウ類」が山麓地帯、特に大きな草原地帯に豊富に生息しているのです。これらの多く

は温帯草原性のチョウ類と呼ばれ、ヒメシロチョウ、ゴマシジミ、ヒメシジミ、アサシジミ、ヒョウモンチョウ、それからホシチャバネセセリなどが知られています。そしてこれら全てのチョウ類が現在全国的に数を著しく減らしており、ほとんどが環境省の絶滅危惧種に選定されているとても希少な種群なのです。今、全国で1番少なくなっている環境（景観）は皆さん何だと思われませんか？実は森林ではなくて草原なのです。草原といってもゴルフ場や公園の芝生のような草原ではなくて、いわゆる半自然草原と言って人間が昔から草刈りなどをして茅場として使ってきたような草原で、今、日本の山野から一番なくなっているんです。富士山の山麓部では未だに野焼き（梨が原）や草刈り（本栖高原）などが行われ大きな草原地帯が維持されており、これら多くの草原性希少チョウ類の生息が維持され、全国的に見ても極めて重要な希少種ホットスポットとなっているのです。

先ほどのヒメシロチョウを例に挙げますと、これはモンシロチョウをちょっと小さくした白色のチョウですが、富士北麓では北富士演習場（梨が原）でよく見られるチョウです。ちなみに、演習場では飛翔している白いチョウの多くがヒメシロチョウであり、郊外でよく見かけるモンシロチョウを探すほうが難しいことは大きな驚きです。そして



ヒメシロチョウ

このヒメシロチョウ、北富士演習場を一旦出ますとほとんど姿が見られなくなり、もちろん富士吉田の市街地周辺では全くその姿を見ることができなくなります。さらに、東京都ではもう数十年前に絶滅し、数年前には栃木県でも絶滅宣言が出たチョウなのです。そんな貴重なチョウが富士北麓にはまだ生息し生き永らえています。我々はその動向をずっと注視して、何としてもその命脈を維持していかなければならないと考えます。

最後に名前にフジ（富士）のつくチョウを紹介しておきます。フジドリシジミと言います。オスは翅の表面が青緑色に輝く美しいシジミチョウです。富士山で初めて発見されたのでこの名がつけました。幼虫はブナの葉を食べ、富士山ではブナが多く見られる大室山周辺などに生息しています。このような富士山にゆかりのあるチョウにも注目してほしいです。



フジドリシジミ

さて、最後は植物です。前段でお話ししましたが、他の生物同様、富士山は高さごとの植物相の違い、すなわち植物の垂直分布の変化パターンを観察するにはうってつけの山なのです。麓の山地帯から亜高山帯、高山帯と上がっていくに連れて、登場する植物が次々に変わっていく様子が手に取るようによく分かります。この変化はスバルラインを利用して車の車窓からも観察できますが、できれば吉田口登山道などを利用して麓から登山すれば、よりじっくりと詳細に観察することができ、私は麓からの

登山を強くお勧めしたいです。

それから富士山の亜高山帯から高山帯の植物。これも前段でお話ししたように、日本アルプスの高山域の生態系とは大きく異なり、「富士山ならではの高山域の植物」を思う存分観察していただきたいですね。なぜなら、日本アルプスの高山帯を歩いたのではほぼ観察できないような植物の世界が展開されていますので。資料の写真に写っている背丈が低い樹木は御庭のカラマツです。カラマツと聞いて皆さんびっくりされたと思いますが、低地ではカラマツは大きく成長して背の高い高木になりますが、なんと五合目あたりの森林限界付近に生育するカラマツは、強風や厳しい気候のために背



御庭のカラマツ

が大きくなれず、背が低くずんぐりとした樹型になります。でもこのような樹型のカラマツ、富士山の高山帯ならではの風景でございます。と言いますのは、日本アルプスで背が低く地上を這ったように生育している樹木はカラマツではなくハイマツなのです。さらに富士山の高山域は火山性の荒原なので、このような環境を好むオンタデという植物が山頂の方に向かって広く分布しています。まるで植物が登山しているようにも見えます。もちろん日本アルプスの高山帯では見られない風景です。そしてムラサキモメンヅル、フジハタザオ、フジアザミ、サンショウバラといった富士山だからよく観察できる植物が分布しています。皆さん、これで「富士山のような高山域生態系を観察したければ、富士山に登るしかない」ということがよくお分かりいただけたかと思えます。

最後にちょっと宣伝のようになってしまいましたが、私の勤務する富士山科学研究所では、本年5月末に「富士山境目図鑑」という自然観察の本を出版いたしました。これはまさに「登頂とはまた違う新たな富士山の魅力を探しに出かけませんか」という富士山五合目周辺の自然観察図鑑です。見ていただくと分かりますが、御中道と御庭・奥庭、そして五合目から佐藤小屋にかけての地図をつけて、そこにどんな植物や地質が見られるか、またどんな鳥や獣、昆虫などがいるのか、どういうところにどんな見どころがあるのかというようなことを解説した本です。もちろん山頂まで行くのも富士山の魅力ですけれども、五合目のような中腹部のところも富士山を知る、楽しむにはもってこいの場所なのでぜひ観察してほしいという思いを込めて、執筆者全員が鋭意努力して完成させた本でございます。以上のように、これからの富士登山者には「富士山ならではの自然」を観察し楽しみながらの登山を是非ともお勧めしたいし、そのほうが登山やウォーキングの楽しさが倍増するのではないかと考えております。

(以上、本文中で使用した図、写真の出典：「まると観察 富士山」2013年刊、誠文堂新光社、東京)

吉田口登山道はどの山小屋からのご来光を拝める

中村組合長　私は富士山の七合目で山小屋を経営しておりますが、先ほど羽田課長からお話がありましたように、以前の山小屋はすし詰め状態でうなぎの寝床のようであったわけですが、批判もありまして徐々に改善して今は、非常に居住環境が良くなっています。私が日頃から強く思っているのは、富士山は素人の登山が多いので自分のいる高さの感覚が分からないということです。どれくらい登れるのか自分で自分の体力がわからない。そういう人たちが翌日の朝が楽だからと3000mの高さにある山小屋を予約して、予約したはいいけれどそこまで登りきれない。どうするかというと途中の山小屋でどうしても泊めてもらいたいとなるんですが、そういう時に非常に困ってしまうんですね。山小屋というのは昔はお助け小屋みたいなどころがあり、元をたせば富士講の人たちが嵐にあったりしたときの避難小屋みたいなどころから始まってきているものですから、飛び込み客をどう取り扱ったらいいのか難しいんです。来年は営業してもコロナのことがあるので各小屋とも定員の半分が半分以下くらいで受け入れる感じですが、こんなところにどうしても泊めてもらいたいという急な人の出てくるのが悩みの種ですね。



それから富士山は素人の登山者が多いと言いましたが、加えて土日集中するという特徴があります。これは日本の社会環境の中でしかたのない傾向ですが、したがって山頂も日曜の明け方に非常に混んでしまい、危険ということで県の方で整理してもらっている状況です。もう一つ富士山は年寄りの登山者が多いんですね。それからたくさんの子供が登ってきます。それらの人は登山などしたことがなくて高さの感覚が分からないために、ただ翌日楽だからと高いところにある山小屋に予約する傾向がある、そこまでいかないうちに高山病になったり疲れきってしまう人が多い。

日本人というのは登山をしながらもどうしても時間に追われるんですね。もう少しゆとりをもってゆっくり登って富士山を楽しもうということがあってよいと思います。山梨県側は山頂に登らなくてもどこからでもご来光を楽しめるので、あんまりせかせかせしないで本当に山を楽しんだらどうでしょう。たまたまウチの小屋の



写真提供：合力

前は高山植物も見られるし、御来光も見られるし夜景もきれいだし、一晚、下界から離れて山を感じて楽しんでもらって、そのあと頂上に登るなり下山するも良いのではないかと思うわけです。

私の小屋には炉端があるものですから、夜、炉端を囲んで楽しんでいるグループがあります。毎年7月、8月に2回上がってきて、グループのコミュニケーションということで楽しんで泊まって、夜明けを迎え小屋の前で日の出を迎えて、そして下ると。下山をしてからどちらに向かうんですかと聞くと石和温泉だったり地元の温泉だったりして、ゆっくり食事をして帰るなどのコースをとっているみたいです。

日本人は楽しみ方が下手だと言われますが、日本に駐留している外国のキャンプの家族なんかは全然違います。先頭の方は1時間も2時間も先に行っているのに自分は途中の山小屋でゆっくり休んで友達といろいろ話をしたりしている。登れるところまで登って間に合わなければそこで下ろうよという感じです。そんな楽しみ方もあっていいんじゃないですかね。ところが日本人は先ほどから言うように、山頂でご来光見なければいけない風習でもあるかのように上がっていきます。我々にすればどこから見ても同じ朝日で、どこから見てもご来光はきれいだと思うんですけれど。そんな状況ですが何とか来年はコロナ対策しながら営業していきたいと思っております。



ふもとでゆっくり、五合目でゆっくり、体を慣らして登山をしよう

近藤光一氏 富士山のガイドとして23年間、日々お客様に寄り添って業務をしておりますので、そのガイドの眼で見たこれまでの流れとか課題とか、最後にはこんな風な対策をしていくと新しい富士山登山のデザインができるのではないかと思います。

私はもともとの5年くらいは、マスツーリズムと言いますか募集型の旅行会社さんが集めてくださった登山ゲストの方を登山案内人という立場で案内していました。その一方でヨーロッパで進んでいたエコツーリズムというものにも興味がありまして、富士山で是非エコツーリズムを実践したいということでスイスに視察に行ったりもしました。ヨーロッパでのツアーというか、本来の山の楽しみ方であったり、ふもとの町で出会う住民とのふれあいとか、食べ物を楽しむといったような、そういったことを富士山でできないかなということで、今は



写真提供：合力

自分なりにエコツアーガイドという立場で業務をしています。

私は富士山というフィールドを利用する中で自然を守りながらということを基本に行っていますが、もう一つエコツーリズムで大事なことに地域経済活性化というのがあります。なので富士山登山に来てくださった方にはふもとでもお金を使ってもらおうというアプローチで活動しています。どうしたらふもとで使ってもらおうかという、あえて夕方遅く下りてくるような行程にするということがあります。そうするとその日のうちに帰れなくなりますからできるだけ夕方ゆっくり下りてくる、これは「ずらし登山」ということで近年では環境省なんかでも進めています。あとは早く五合目に上がって高度に慣れてもらうということもしています。その為に前日のうちに麓まで来ていただいて泊まる、あるいは五合目に泊まっていたいてというような仕掛もツアー造成の中で続けています。

その中で見えてきたことなのですが、ポイントの一つ目は登山者の形態が変化してきていることです。皆さんもご存知のように以前は団体で来ていたものが徐々に小グループになったり個人になったりしています。世界遺産登録後はインバウンドが増えているということもあります。あと注目すべきはファミリーとかカップルとか小規模なグループ形態の登山者が増えているというのをここ5年くらい痛感しています。

二つ目ですが、今度は逆に受入れ側ですが、例えばガイドの形態も変わってきています。旅行会社もどんどん改善し人数が多いときはガイドを二人つけるなど変化していて徐々にいい傾向にきていると思います。先ほど組合長さんからもお話しがありましたが、山小屋の個室を使わせていただいたり、来年以降は二人部屋とか三人部屋みたいな密にならない利用方法も計画してくださっていると聞いています。20年前に比べてどんどん変化していることを実感しています。

ガイド自身も変わってきています。以前はたばこを吸いながら案内することがあったり、服装なども個性的でした。今はクレームにもつながりますし、自分の安全管理のためにもしっかりできています。一方で個人的にはガイドの個性がなくなってきたというのが心配している所です。やっぱり山に登る楽しみとして風景だけではなくてガイドとのふれあいとか、山小屋の若者の笑顔が良かったとか、そういったことが求められます。お客様に今回の登山で一番印象に残っていることは何ですかとお尋ねすると、「山小屋の若者の笑顔」と出てきたり、「近藤さんの想いが伝わった」とかそういうことが出てきます。古き良き時代の文化みたいなものがどんどん薄らいでいくんじゃないかという心配もあります。

三つ目ですが、最近は情報開示が進んでいるということです。インターネットを開くと富士山の登り方から、どのコースが良いのか、どんなことを注意したらいいのか、山小屋の予約の仕方、服装もこんなレンタルショップがある、歴史はこんなことがあると何でも分かります。それはとても大事なことなのですがやり過ぎるとマイナスになるような感じがしています。いろいろな影響もでてます。まずガイドの仕事がなく

なってます。富士吉田市公認案内人の登録は多い時には230人とかあったんですが今は減っています。特に若い世代のガイド辞めてふもとの仕事をしてた方がいいとか、逆にベテランの人たちもそろそろ見切りをつけて富士山の仕事は退こうみたいな話がよく耳に入ってきます。持続可能性ということを考えて、地元の子供たちが将来富士山のガイドになってみたい、だから大学へ勉強しに行くんだ、そしてふるさとに帰って富士山の魅力を伝えていきたいとなることを私は強く願っています。これからはガイドの育成や雇用のサポートも考えていかなければいけないなと思っています。また、県内の子どもたちに「尾瀬学校」のような体験の場として「富士山学校」を構築していくことが大切だと考えています。バーチャルも良いですが、より深いリアル体験が必要な時代となっています。

情報が開示されることで個人登山が増えているので、高山病になる人が増えたり、転倒したりあるいは落石の事故なんかも増えています。去年、私の頂上直下で事故が起きました。残念ながら若い外国の女性がお亡くなりになりました。原因は分からないのですがガイドの役割は改めて大事だなと思いました。また、環境面での課題も当然あります。たとえば登山道のゴミが増えていることは皆さんご存知だと思います。ゴミ問題も継続的に啓蒙していくとか必要だと思っています。

四つ目は登山スタイルの多様化への対応です。富士山の登山道を歩いて自然とか文化とか、いろいろな多様性に対応できる体制を作っていかなければと思っています。例えば達成感を求める人、あるいは安全重視でいきたい人、付加価値を求める人、オールラウンドにめぐっていききたい人と、いろんなニーズがあります。そういったところに対応できるようにハード、ソフトを整備していく必要があると思っています。ちなみに私のツアーは料金3万円をいただいているんですが、最近は10人分出すから夫婦だけでお願いしますというような方も出てきています。二人で貸し切って30万円を出して満足してまた来たいと言ってもらえることは、それなりの対応をし、準備をしっかりしなければならないので、これからも更にブラッシュアップしていきたいと考えています。

先ほどもお話ししたように大切なのはガイドへのサポートですね。ガイドが辞めていくのではなくて、もっともっとモチベーションを上げてスキルアップしていく機会を作っていくことが必要かなと思います。あとは皆さんにも力を貸してほしいのですが、ガイドの仕事を増やすには、モチベーション保つためにはどうすべきか、といった視点を大事にしたい、そして、多様性というキーワードも模索していく必要があると考えています。

最後に提案をしたいのが富士山五合目のことです。今、県の総合管理センターがあり非常に機能していますし、富士吉田市などでも安全指導センターを運営してくれて以前に比べてとっても良くなっているんですが、できれば少しコンセプトを変えて訪れる人たちのサポートセンターみたいな、ヨーロッパのアルパインセンターみたいなも

のがあればもっと良いのにと感じています。そこにはガイドや研究所の方やいろんな方たちが常駐して利用者を受け入れていくような仕組みが作れたらいいなと思います。以前、富士山科学研究所の元所長が「そういったことができないか」と動いてくださったことがありました。以前、当時の環境大臣にも直接お話ししたら環境省で作らしましょうみたいなことを言ってくださったこともあったんですが、現実的には難しくそのままという形になっています。是非、五合目で富士山の頂上だけではなくて、夏以外も五合目あるいはふもとへも案内ができるようなハードとソフトも両立をすることによって、富士山の新しいブランディングができるんじゃないかなと思います。それと連動して将来的にはふもとにも富士山を観るとか眺めるとか、自然や動物植物を楽しむような、そういった本当の意味の総合型の一ビジターセンターみたいなものが出来るといいのではと考えています。簡単な事ではないですが、こういったことも将来に向けて考えておかないと現状と比べてもあまり変化が起これないのではと感じています。

富士講の歴史をたどれる「ふもとから登山」のすすめ

羽田正利氏 富士吉田市では五合目から山頂を目指すだけが富士登山のあり方ではなく富士登山の歴史や自然を体験できる「ふもとから登山」という事業を進めています。先ほど北原先生から富士山の植生について、堀内先生から富士山の歴史的な道についての話がありましてそれに関連しますが、市では毎年、富士急行やJR東日本などと一緒に「富士登山ガイドマップ」を作成しPR展開しています。ここには富士登山の基本的な情報、五合目から上の状態についても紹介していますが、一番大切なのは金鳥居から中ノ茶屋、中ノ茶屋からの吉田口登山道について「ふもとから富士登山」として紹介しております。



この中に「吉田口登山道は金鳥居から先が正な道」という記載がありまして、そこから先が信仰の対象、世界文化遺産の対象になりますが、世界文化遺産富士山の歴史が色濃く残っている地図を含めて紹介しております。

自然環境を楽しむ吉田口登山道ではトイレの問題も大事ですので、仮設トイレの設置をしたり、ふもとから五合目の建物はほとんど残っていない状態ですけれど一部建物が残っている馬返の大文字屋さんをお借りして登山者の皆様にボランティアの皆さんから水などの提供や案内を



写真提供：富士吉田市

しております。こういった活動を引き続き行っていくことで登山者にふもとからの魅力というものをより発信していきたいと思います。十数年前はシーズン中には約2000人か3000人ほどしかいなかったんですけれども、最近ではリピーターの方も徐々に多くなりつつありまして、1万人を超える皆様が来るような環境になってきました。山頂をめざすだけでなく自然環境を楽しみたいという声も非常に多く伺っておりますので、「継続は力…」ではありませんけれども引き続き「ふもとから登山」を推奨していきたいと思っております。

しっかり休み、余裕をもって「正しい形での弾丸登山」を楽しもう

野口健氏

初めまして野口と申します。いろいろとお話を聞いていまして面白かったなと思っています。富士山が世界文化遺産に選ばれましたが、なにゆえに文化遺産に選ばれたのかを知らない方も意外と多くて、講演会で全国を回っていろいろな会場で富士山の世界遺産は自然遺産だと思う人、文化遺産だと思う人と聞くと意外と自然遺産だと思っている人が多いんです。そもそも自然遺産と文化遺産に分かれていること自体を知らない方も多いですし。ただ世界遺産に選ばれてうれしい人っていうとみんな手を上げるんですね、ですから世界遺産になる意義というよりも世界に認められるということを楽しむのがひょっとしたら国民性かなと思っています。

先ほど皆さんから山頂からの御来光という話がありました。私も最近まで知らなかったのですが、富士講をされている方にお話を聞きますと山頂でご来光を拝むというのは一番やってはいけないことなのだそうです。どういうことかという、山頂からご来光を拝むと太陽を上から見下ろしてしまうことになり、そんな不謹慎



なことではないと、本来富士講というのは八合目とか九合目あたりから、目線よりちょっと上の高さから太陽が出てくるところを拝むのが本来のあり方だということをお聞きしまして、ああそうなんだ、僕も何度か山頂で万歳しちゃったと言ったら、バチが当たりますよって言われました(笑)。ですからせっかく文化遺産に選ばれた以上はもっと文化的なところ、堀内さんのお話しされていた巡礼登山などは、自分も個人的にやってみたいなと本当に思います。

生態系の話ですけれども僕も富士山の一番好きなルートは五合目から上ではなくて、精進湖登山道の三合目から五合目の奥庭山荘につながる登山道なんです。今は台風での倒木などもあってなかなか入れない状況なのですが、短い距離でありながら植生がどんどん変わっていく。いろいろな方をお連れしましたが皆さんあそこは大感動するんですね。場所によっては屋久島以上のコケのじゅうたんがありまして、五合目まで

上がると盆栽のような日本庭園があり、奥庭山荘からの美しい富士山があります。ですから富士山の楽しみ方っていうのは本来こうあるんだろうなっていう風に感じながら登っていました。



富士山はどうしても夏に人が集中しますよね。この夏に集中するお客さんをどう分散させるかということも大事なんじゃないかと。あとは夏山以外の時期ですね。例えば12月、1月、2月にこのあたりに来ますとガラーンとしていますしね。冬にどう観光客を呼ぶかがポイントではないかと思っていて、夏に集中するのをどう分散していくか、これにはいろいろオプションがあるのではないかと思っています。それで何年か前から始めた「富士山ビュートレイル」というものがあるんですが、山中湖周辺の山だったり御坂山系だったり富士山を眺めながら歩くんです。御坂は途中どこでも下りられますし、本栖湖までつないでいきますと結構長いルートになるんですね。もとはヒマラヤに行く前のトレーニングルートとして自分で勝手に名前を付けて歩いていましたが、早朝5時くらいに出発すると三ツ峠あたりで朝日の富士山が見えて、横にずうっと移動していくと徐々に角度を変えていく富士山があり、西湖あたりで下りるわけですが夕日で真っ赤になった富士山を見られ麓には夜景が見えたりと景色は非常にいいんですね。当たり前ですけど富士山に登っているときにはなかなか富士山は見えないわけで、富士山から少し離れた場所で富士山をいろんな角度から眺めながらトレッキングするというのがいいんです。夏は雲が多いですが、秋から春にかけては非常にクリアで雪もさほど降りませんから、ガイドがつけばこれは優雅でいいコースになるなと思いついて歩いています。富士山は登っても楽しいけれども眺めても楽しい。



御坂山系(雪頭ヶ岳)からの富士山

温泉の中から眺めてもいいですけど、やはり体をつかって汗をかきながら達成感というのを同時に求めたい。低山とはいえ5時間、10時間歩きますとそれなりに達成感はありますし、下りたら温泉に入るといような、そういうコースをもっともいろいろ考えていければいいなと思っております。

今はコロナでインバウンドはゼロですし、日本人観光客も減って非常に地元の経済も厳しくなったと思うんですけど、考え方によっては、こういう言い方が正しいかどうかは別として、今までさほど努力をしなくてもインバウンドでたくさんの方が来てお金がたくさん落ちたわけです。以前からいろいろな指摘をされ、今でも指摘がある中でなかなかそれが大きな形として動かなかったんですよ。コロナである意味ピンチですが、このピンチをどうチャンスに変えていくか、逆にこういうときでない

じっくり考える暇もないんですよね。忙しいときは日常生活に追われていますし。いろいろな活動が止まっていますからこういう時にみんなでじっくり考えて、このピンチをどうチャンスに変えていくかっていうのがある意味重要な、また貴重な時期ではないかと思っています。

それから独立峰のことですが、独立峰っていうのは面白くて独立峰ゆえにいろいろな戦略があると思っています、富士山もそうですが例えば鳥海山も独立峰じゃないですか。あるいは白山とか。海の近くにあって似ているこの3つを並べて、どう違うかとかうまく伝えていったら面白いかなということを感じています。

来年は富士登山はやっぱり再開すべきでして、問題はどのような形で再開するかですね。「弾丸登山がいけない」という印象がだいぶ広まったし、僕もそれに加担した記憶はありますが、ある意味「正しい形での弾丸登山」という伝え方が必要かなと思っています。先ほど近藤さんが言っていた五合目でしばらくステイするとか五合目に泊まるっていうのもそうすれば高山病になりにくいと思うんです。あとは休憩の取り方ですね。中村さんがおっしゃっていましたが皆、時計を見ながらどんどん先に行く、だから休憩する時間もないし。あとは水分の取り方もそうですね、できるだけ水分をとってできるだけおしっこを出すということが高山病対策の基本中の基本ですがそれがなかなか守られていない。ですから最近までは弾丸登山はだめよっていう話でしたが、正しい弾丸登山のあり方ということ伝えていくと、意外とみんなが、え？ いけなかったんじゃないのっていうところから注目されるんじゃないかなっていう風に思っています。

伝統的な富士山の登り方をしっかり伝えたい

堀内会長 それぞれご専門の立場からの皆さんのお話を伺って、富士登山の多様な楽しみ方、いわゆる伝統的な楽しみ方に加えて歴史や自然、山麓・山頂・山腹、それとシーズンも春・夏・秋・冬、そして朝・昼・晩、それから遠くから見る富士・実際に登る富士・歩く富士、様々な切り口をしっかりと伝えて実践していただけるかということが最終的な方向性になるのだということがよくわかりました。

また来年に向けては富士吉田市から、「富士登山を再開させるという基本方針の下でどのようにそれを実現できるかということで県も交えてお話を進め予算も付けていただける」とのお話を賜り、私どもから見ても本当に有難く心強い方向性で安心をいたしました。

弾丸登山のお話もいただきました。富士山の



写真提供：合力

基本的な登り方は堀内さんから過去の歴史、伝統についてお話の通り、そもそも山頂でご来光を見るのが正しいのか正しくないのか、昔からやっていたのかとのことでした。基本は山小屋でしっかり休憩をとり、場所はともかくとして御来光を拝むという神々しい行為を経験し、加えてせつかくならば頂上を極めたいという満足感と達成感から山頂を小さいグループでしっかりとしたガイド付きのもとで目指すことなのだと思います。

お手元にコピーをお渡ししましたがこれは9月29日に静岡新聞に掲載された記事です。その前日に静岡県で行われた富士山の新しいあり方検討会議の初会合の様子です。記事にあるとおり検討の基本方針は「可能な限り富士登山ができる方向で対策を練る」こと、二つ目が「五合目以上の登山が困難な場合であっても別な基準で五合目観光のあり方を検討する」ということで、これは山梨県とか富士吉田市とか私どもの考えているやり方と同じようですが多少ずれているんですね。

もう一つ私が気になったのは、静岡県が現在山小屋の完全予約制を関係者と検討しており、その中で「山小屋の予約を確認してシャトルバスに乗車させることはできないか」という質問が静岡県からバス会社にあったことです。それに対してバス会社だけでは難しいと答えています。山小屋の完全予約制と予約していない人たちは五合目以上に入れないという方向性について既に静岡県が多少先行しているくらいがあります。先ほども申し上げましたが、山小屋を予約する、もしくはしっかり活用して利用しながら富士登山をするということはモデルケースであり基本であるということは全く異論はないんですけれども、逆にこれから先、山小屋のキャパシティがいろいろ制限を受けてきたり、先ほどお話があったように昼登山ですとか、ゆっくりと野鳥と虫とチョウ、それから自然植生、景色を楽しみながら登るという方向性ですとか、諸悪の根源になっていた「頂上ご来光弾丸登山」ではない、山梨県側の登山道でご来光を仰ぎながらゆっくりとマイペースで頂上を目指すというスタイル、こういった方向性の広がりも先ほど申し上げた多様な楽しみ方の中に入ってくるのだろうなと思っています。

先ほど野口さんから、ある程度ショック療法を与えながら正しい富士登山の方向性についてみんなで考えてそういう方向性に持っていこうという話がありましたが、我々としては今までの話のとおり様々な富士山の楽しみ方ができるということが大切な方向性で、お金のある人だけとか限られた人しか登れない富士山というのは問題があると感じます。

山梨県側で富士山の「知床化」を検討しているという情報もあります。知床エリアに入るときに制限をかけ、許可が必要とのことですが、同じようなことでいえば玉山に登るときは1日に100人くらいしか登れません。そんな形で本当に限られた運のいい人しか登れない山にするという方向性があるようです。山小屋の経営を考えたときに、高付加価値で極めて高額な料金に転化するというようなことになるでしょう

し、こういうことも本来の富士山の歴史からみても異なる方向性になるのではないかと心配しています。入山料のコントロールの方法というのはこれから大きな課題になるんでしょうけれども、ある程度の方々がゆったりとしながら楽しめて、なおかつそういう方々に対して教育を施したり、意識を高めていただいて環境を守りながら無理をせず登って楽しんで富士山のすばらしさを広めていただきたいと思います。それから山小屋についても新しいビジネススタイルでしっかりと富士山の恵みをこれまで通り享受できる方向性を考えていただければと思いますがいかがでしょうか。

「御来迎」は昇る朝日を背をして拝むもの

堀内眞氏 現在の登山の前に歴史的なあり方を少し述べさせてもらいたいと思います。スバルラインの開通以前には御師坊や旅館に前泊をすることが大前提だったわけです。翌朝、ふもとを出発して三合目で昼食をとるので、そこを中食堂と呼んでいました、午後に五合目を通過して足の弱い人は七合目付近で宿泊し、健脚な人はもう少し登ってから小屋入りしました。じっくりとは休めないまでも体を横たえて翌日に備える必要があると思います。

私の経験では多くの山小屋で、夜中の2時から3時ころになると、ご来光についての案内によって起き出して出発します。頂上には4時ころに到着し、そこで1時間くらいすると朝日が昇ってくるのを見届けますが、これが古くからの登山のあり方でした。ですから、通常はヒヤマ（日山）、宿泊なしの登山はなかったと思います。5時ころにご来光を拝して、健脚な人はお鉢巡りをしますが、1時間もあれば可能です。7時ころには下山することになって、それ以降、10時ころになると山頂の小屋のアルバイトたちは手許持ち沙汰でおしゃべりをしている、そのような光景が旧来の登山だったといえます。

ご来光についてですが、富士講中の認識もあるかと思います。「御来光」というのは「御来迎」であって、あの世に向かう人を迎えに来てくれる仏さんが阿弥陀様であり、その阿弥陀様の姿を御来迎（引接来迎）と認識していたわけです。吉田口は須走口と八合目で結節し、山頂に立つことのできる道ですが、昇りくる朝日を背に火口越しに西方を拝していました。条件がよければ自身の影をブロッケン現象で見ることができる、それこそが御来迎だったわけです。とてもありがたいことで、生きながらにして極楽浄土というか、その入口に立つことになり、現世の苦悩を止揚できる。



写真提供：合力

ですから麓からきちんと歩き、草原帯をたどり木立を通過して森林限界を抜けて山頂に到達する。運がよければブロッケン現象を見ることがかなうのですが、これが伝統的な

富士登山のあり方だったと思います。

私の提案としては、「もう 1 泊して山麓からちゃんと歩いて途中で宿泊もして頂上を目指す。運が良ければブロケン現象を拝して、これこそがご来迎だと達成感を持って下向する」、そのような登山をすれば、文化遺産としての富士山のあり方をより深く理解できると思います。伝統的な山なので、ふもとの町や神社、山内の山小屋など様々な施設がもつ機能を、伝統的なスタイルにもう一度光を当てて再活用したらよい、山小屋の宿泊についても七合目から八合目だけにするのではなくて、もう少し下の方にも泊まりましょう、というような提案も含めて、伝統的な登山にも対応できるように条件整備したらいいと思います。

最近、勘違いしている人が多いように思われますが、夜行登山=弾丸登山、だからやめましょう、みたいな話ですが違うと思います。世界遺産センターでは、新たに参詣曼荼羅を描いてもらいましたが、山内に黒雲が大きく描かれています。神仏と交信することができる夜間に登っていく、夜行登山を表現しています。夜を通して登頂し朝日を待つ、という時間を体験しましょう、というメッセージであって、文化遺産としての富士登山だったらぜひ推奨したいものです。

堀内会長　　そういう意味では 2 泊 3 日という一つのスタイルがありますよね、前泊して富士吉田でご飯など食べたりして、1 泊で帰ってくるのではなくて 2 泊 2 日ないしは 2 泊 3 日で登る、それからかつてはそうはいっても富士登山、1 日少ない時でもそれなりの人数が登ってますよね。100 人とか 50 人とかではなくて。それから前にも伺いましたが、ヒヤマ、昼間の登山というのも昔からの登山のスタイルだとおっしゃられていましたが、それはそれであるんですか。

「もう 1 泊」して富士山の魅力を味わう

堀内眞氏　　日山（ヒヤマ）は、山に係る人たち、登山者よりもむしろ強力や荷揚げなど、地元で働く人たちの登山方法だったわけです。あと登山者の数では、万延元年（1860）、女性登山が事実上解禁されたのですが、特に吉田口はこの年、1000 人以上の女性たちが山頂をきわめています。

それから、山麓には富士山に対する伝統的な物忌の習俗があります。また、前の日に富士吉田に泊まるシステムは残されていませんが、周辺も含めて前泊して登りましょう、そして野鳥や動植物の観察もしましょう、山小屋へ滞在して山頂に立ちましょう、という旧来のシステムの中で、さらに 1 泊しましょう、ということで登山を楽しんでもらうことができると思うし、システムの整備はもちろんでしょうし、登山道やそのほかの整備も含めてということであればこれは十分可能だと思います。

静岡県は山開きを 7 月 10 日に繰り下げました。山梨県とでは 10 日間タイムラグがあります。いろんな考え方があると聞いていますが、従来、多くの人々は、朔日を山開

きとし、東京やその近郊にある神社なども多くが7月1日に祭礼を催しています。そのような歴史や伝統といったものは、やはり大事にしていきたいと思います。機械的に10日という発想ではなくて、きちんと伝統を守っていくスタンスを持つべきです。そういったところも含めて静岡県と連携すべきです。信仰的なことを守っている地域なので、このあたりは、私たちがもっともっと多くの人達に発信していかなければいけないと思っております。



村山浅間神社山開き神事（7月10日）

安全で楽しい「昼間登山」のすすめ

野口健氏 7月1日、10日の問題っていうのは以前からあるわけじゃないですか。世界遺産になるからにはここはせめて合わせほしいなっていう声が上がっていましたよね。こちらでは1日に山開きしますけれども静岡は10日ですよ。ところが山頂の施設は静岡側だとすると山頂のトイレが開いてないんですよ。寒い中ご来光を待っていますからトイレには行きたくなくなる。ですから環境面も含めてこの7月1日、10日問題というのは大事で、うがった見方をすると静岡と山梨の関係性がそんなにラブリーじゃないのかな、なんてことを思いながらここは本当に合わせてほしいな、せめて来年からは合わせてほしいなと思っています。

先ほど堀内さんがおっしゃった「霊峰ゆえに夜登るというのもある」というのはおっしゃる通りだと思うんですけども、同時に夜登るというのは特にツアーだったりすると数人のガイドさんと大勢のお客さんで行くわけですが、そうしますと夜は暗いのでガイドが一人一人のお客さんの顔色とか確認できませんよね。そして夜はどうしてもヘッドランプを付けて登るのでストックになりがちなんですよ。景色を楽しむわけでもないでどんどんスピードが上がってしまいます。今後、弾丸登山の正しいやり方を進めていくとすると、夜というのは勧める側としては、できれば避けた方がいいかなと思います。午前中に登って昼ごろ登頂して夕方までにおりてくるというのがいい。夜はやはり危険ですよ。先ほど中村さんもおっしゃっていましたが富士山というのは素人が圧倒的に多くて自分のスピードなんかもわからず気付いたら高山病になっていることがあるわけですから、やはり午前中、昼間に登って夕方、暗くなる前には下りてくるということが必要だと思うんです。

全国いろいろな山がある中で山小屋を24時間営業しているのはたぶん富士山くらいです。山小屋の負担も大きいと思うんですよ。富士山に行きますと、山小屋の方が疲れてるなどか、山小屋の方の態度が悪かったと聞くことがありますが、それはそのよう

な現状ではやむを得ないんじゃないかと思いますよ。24 時間やってると負担も大きいですからね。あるとき僕が見たのは、夜中に雨が降ってきて、登山者でも雨具を持っていない方が多くて。それで、寒いからワッと山小屋の中に入って来るんですよ。入りきれなくてもどんどん入ってくる。朝の満員電車のような感じになるわけですよ。山小屋の中では「入ってこないで、出て出て」などと怒鳴っている方もいらっしゃるんですが、これはもうやむを得ないわけですよ。ですから夜間登山というのはどうしてもそうなりやすいんだなと思っています。

ですから来年に向けて正しい弾丸登山のあり方というのを明確にしたらいと思うんです。この時間帯がいいですよとか、順応しながら登ってくださいとか、五合目で泊まるとか。こうすれば弾丸登山でも安全ですよという分かりやすいメッセージを出していった方がいいかなと思っています。

ふもとからゆっくり、歴史や自然を味わいながら登る楽しさ

北原正彦氏 先ほど堀内さんから吉田口登山道を麓からゆっくり時間をかけながら、いろいろ楽しみながら登るというお話がありました。僕もその話には大賛成で、富士山の自然科学的な立場で話をさせてもらいますが、現在はスバルライン五合目まで交通機関を利用して、そこから山頂を目指して登山をするというのが一般的なパターンですが、自然的な観点から言わせてもらえば実は一番生物多様性に富んだ部分、あるいは魅力的な部分というのは高山帯よりも下の方、つまり山麓部から山地帯にかけての部分なのです。ですから歴史もそうですけれども、富士山の生物多様性に富んだエリアを散策しながら富士山を楽しんでもらうためには、麓からの登山を是非推奨したいと思うのです。ちょうど時宜を得たように、富士吉田市さんが麓からの富士山登山に相応しい素晴らしいマップを作っていただいているので、こういったものをもっと広報していただき、麓からの富士登山をもっと推奨していただければ、多様性に富んだ大自然に浸りながら富士山の魅力を十分に感じて歩いていただけるのではないかと思います。

それと野口さんから夜間登山についての色々な問題点のご指摘がございましたが、自然を味わい散策する立場からしても夜は真っ暗で自然散策にはあまり向いていない、どんな植物があるのかどんな動物がいるのかもわからない、自然散策の観点からもやはり夜間の登山はあまり楽しめそうもないのです。ですから富士山の自然の魅力を大いに味わいながら登山するのは、昼間がベストではないかと思うのです。哺乳類など夜行性の生き物もいますが、ライトでも照らさないと姿が確認できませんので、やはり登山をしながらの観察には向いていません。そういった意味からも私は堀内さんが提案してくれた昔ながらの富士講の登山スタイル、すなわちゆっくり時間をかけながら麓の方から歴史や自然を味わいながら登っていく、もちろん昼間に！というのが、今後広く推奨していくパターンなのかなと思います。

野口健氏 2泊3日登山をお勧めしますなんて言うのもいいですね。

堀内会長 親子登山もやっているんですね。

中村修氏 今、市と旅館組合で一般のお客さん向けに、山小屋泊まり2泊3日ということで七合目で1回、八合目で1回、親子登山をやっております。費用を割と安くして参加者は抽選としているんですが、遠くの方が多くいもんですから初めての富士登山で様子が分からない、これに抽選で当たればと参加しやすいということで応募してきてますが、お客さんに聞くと良かったという声が多かったですね。そういうことで今、市の方でいろいろやってもらっています。

富士山に近づき触れるのは、生まれ変わる貴重な機会

近藤光一氏 現場の声といいますか、参考にさせていただければと思います。コロナが始まって2ヶ月くらいは感染対策としてツアーができませんでした。解除後は青木ヶ原樹海でツアーをやっていますが、お客様の声も切実で「富士山に来るのが申し訳なかったようで悪い気がする、このままでは冬が越えられそうになくて苦しかったです」という声が出ています。ただ樹海ツアーが終わると「生まれ変わった気がします」といってくださいます。私のツアーコンセプトとして、堀内先生がおっしゃるように「富士山に近づく、触れる、登るといのは生まれ変わる行為、そして我々が本来持っている素晴らしい能力をもう一度掘り起こしていける」ということを体現するツアーを作っていますので、コロナ渦だからこそ生まれ変わってほしいし、五感を研ぎ澄まして深呼吸をたくさんしてほしいですし、それを日々お手伝いしています。

星空ツアーも始まりますが、最近では周りの光が増えて星がどんどん見えなくなっています。近い将来には星空ツアーができなくなるんじゃないかと危惧もしています。ですから富士山の魅力というのは空気であったり水であったり星であったりしますが、私たちが参加者に伝えているのは、「できたら部屋の電気をつけたらカーテン閉めて頂けたら幸いです」というそんなメッセージなんです。星空が守られれば、渡り鳥も飛んでこれるので、そういうことを伝えるしかないんですね。こういうコロナだからこそ富士登山を体験してほしいですし、アフターコロナの新時代には生まれ変わっていかたいとか、六根清浄したいという古の富士道者の方たちと同じような願いというのがあると思います。私個人としては五合目から頂上までのツアーで付加価値を付けてやってきたのですが、今、麓からのツアーでやろうということで準備をしています。前の日に泊まる、山小屋に2泊する、下りてからもう1泊する、最高レベルの価値を作って発信するという準備をしています。そして究極的には東京から富士道行脚と



写真提供：合力

いうツアーを作り上げていきたいなという思いがあります。これを個でなく地域としてやっていくようなことができるとう本当に新しい富士山のブランドになっていくのではないかと思っています。富士山は当然多様なものですから、その中に一つ光る大きなシンボリックツアーがあると、「最初は無理だけれど将来ああいうものにも参加してみたいよね」というシャワー効果を出せるといいなと日々模索しています。

地元の人にもっと富士山にかかわってほしい

野口健氏 日本中からやって来るたくさんの方に富士山の魅力を伝えたいといった時に、一番大事なポイントっていうのは地元の方がどれだけ富士山を大事にしているかということだと思えますね。例えば、富士山清掃を長年やってきましたけれども実は山梨、静岡両県の方の参加者が圧倒的に少ないんですよ。

登山者もデータがあるわけではないんですけども少ないんだろうと思えます。僕はいろいろな山に登る中で白山に行ったときに思ったことがあります。白山も百名山に入っていてたくさん登る人がいるのですがゴミが落ちていないんですよ。僕はゴミ拾いを20年やっていますから、ゴミがないわけがないといううがった見方をして、岩の影



白山（イメージ）

とかゴミを探すんですけどもないものはないんです。それで登っていると上から登山者が下りてくるんですけども、目が合うと「ようこそ白山へ」と「ようこそ」という言葉を使う方が何人もいますね。山で「ようこそ」って意外と少ないんです。一般的には「こんにちは」ですよ。「ようこそ」っていうのは新鮮でして、山小屋に着いて「登山中にようこそって言う人が多いんですよ」というお話をしましたら、実は白山は地元の方の登山者が非常に多いから自分たちの白山にようこそということなんですということで、ゴミの話もしましたら、その県内の登山者の方が真っ先に拾っているんだそうです。あそこも富士山と同様霊峰ですけど、はるか前から地域みんなで連携して清掃をやっていたということでした、地元で愛される山はきれいなんだなって思いました。

ですからこれから多くの方に富士山の魅力を伝えるために、地元の中でどうやって富士山とのかかわりを持つとか、富士山に登るとか、登らなくても例えば樹海ツアーに参加するとか。ですからこの会の中で富士山を皆でもっと知ろうと地元の中で呼びかけることもすごく重要なポイントになるかと思えます。地元の方が富士山に登ったり樹海を歩いたりということをしてくれないと、清掃もそうですけど、なかなか全国の方が来てもそのつながりが持てないかなと思います。白山はそのところが強いし鳥海山も強かったですね。地元の方からのつながりを感じると訪れても気持ちいいんですよ。

（文責及び特に表示のない写真：一般社団法人富士五湖観光連盟）